

現代における床座の座具の提案 床座と現代のワークスタイルのマッチング

Proposal of modern floor seats Matching the floor to the modern workstyle

私立サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 インテリア・家具研究室

平澤正幸

指導教員 坂元愛史

キーワード：椅子、床坐、姿勢、ワークスタイル、暮らし

1. 始めに

かねてより「椅子」というものの道具としての奥深さを感じており卒業研究では椅子に関する事をやってみたいと考え、題材になるものを調査していた。その時にあることについて疑問を抱いた。

椅子が普及する前の日本は、床に直接座る暮らしを基本としていたが、現代では椅子に座るのが当たり前になっていること、そして床坐姿勢での使用も考慮された椅子・低座椅子が、長大作氏、豊口克平氏らの作品[図1]以後 50 年近く経つにも関わらず新たな形態が登場していないことから、床坐というものは現代に必要とされていないのではないか?と考えた。



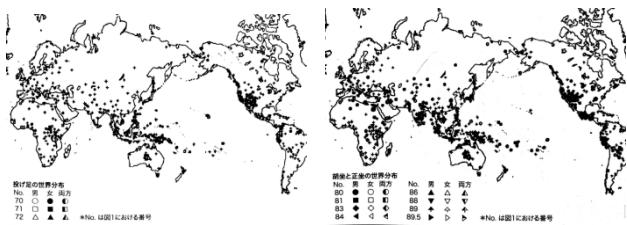
[図1]

しかし、床坐の姿勢には足を畳んで温めたり、その人の最も楽な姿勢を自由に探ることができたりと、様々な有用性が認められる。また、現代では在宅ワークのようなリラックスできる空間での仕事も増えてきている。そこで、この床坐を現代の生活でも利用できるような方法を探り、より快適な作業座具として提案することで床坐という姿勢の新たな可能性を開き、幅を広げるということを研究の目的とする。

2. 調査

この分野に近しい研究として主に矢田部英正氏の著作^{[1][2]}を参考にしながら考察を進めている。

2-1. 文化からみた床坐



[図2]

上記の図は Hews Gordon 氏が発表した論文の床坐姿勢の世界分布図[図2]である。(黒くなっているところが床坐を日常的に

行う国) 世界的には床坐は珍しいものではないと言える。しかし、

上図[図3]は同論文にて展開されている、Hews 氏による床坐姿勢の分類表である。英語ではこの分類を文章でしか表現できないが、日本語では1単語で表現することができ、日本は床坐が生活に深く根ざしていると言える。

2-2. 床坐の利点

立位、椅座位、正座位の三姿勢間の体感温度の違いについて言及した論文ではいわゆる正座や胡坐のような姿勢は床からの熱放射の影響も受ける分暖かく体感すると結論付けている。[3]

他に、床面からの熱授受は温熱的快適感に影響を及ぼすといった話を含め、私的な空間における平座位姿勢と臥位姿勢がよく見られることも指摘されており^[4]人々のリラックスした状態の 1 つに

床座姿勢があると言える。

2-3. 既存の製品

「床坐」を補助する、もしくは可能にする座具の例としては、先に述べた2種の椅子に代表される低座椅子の他に座布団や座椅子などが挙げられる。しかしこれらは畳や板間などの床坐で座る前提の空間での使用を想定しており、現代の我々の生活空間にある、椅子を基準とした机や家具らに対しても位置が低いものとなる。

後述するコンセプトにもあるように、自宅でのデスクワークを想定していること、また、既存の製品らとの差別化を図る意味でも本研究では「椅子座空間での床坐ができる座具」を目指す。

3. 問題点の整理とコンセプト

調査から得られた問題点としては以下のことが挙げられる。

- ・床坐の姿勢は現代の一般的な机の高さと噛み合わない
- ・床坐の空間と椅子座の空間をハッキリ区別する傾向がある
- ・椅子としてのアプローチに変化がない
- ・在宅ワークなどのリラックスできる空間での仕事の存在

これらの問題点から「在宅ワークの人を対象とした、椅子座空間で床坐姿勢を可能にする椅子」をコンセプトとして立てる。

4. 試作

椅子を用いたアプローチの参考として先の調査の内容で触れた低座椅子の特徴とは異なる座面のアイデアを試作する。

既存の「座面が平坦、かつ広い」という特徴に対してこれと異なる特徴を持つ座面のアイデアとして、「座面が凸型、かつ2段」というものを考案した。

階段の上に座っている際に考えついたアイデアで、2段にして臀部だけでなく脚部の置き場も作ることでよりカジュアルに座ることができるという体感からきている。また、凸型の座面は凹型の座面に見られがちな固定感を解消し、床坐姿勢の幅を広げることができるのでないかと考えてい

る。

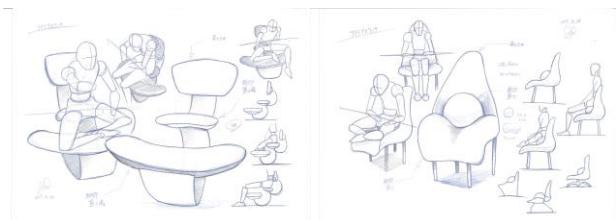
現在ではこのアイデアを軸に、段同士の高さや幅などを見るための試作モデルを製作中である。

5. 検証

上記の試作および他に製作する予定の試作品を11月23、24日に開催されるわが校の学園祭や12月7、8日の大学コンソーシアム八王子2019にて展示し、体験してもらうことで、アイデアや座り心地に関して検証をする予定。

6. 今後の展開

アイデアの有効性を見るための試作モデルを作る一方で、ワーキング・モデルの製作にも備えてそのスタイリングと設計も並行して行っていく予定である。実感を伴うアプローチであるため試作と検証を重ねて本製作に移り実際にしようすることができるところまで持っていく。



7. 引用

[図1]

左 1960年 長大作氏 作 「低座椅子」

右 1963年 豊口克平氏 作 「スポーツチェア」

[図2, 図3]

Hewes Gordon W 「World distribution of certain postural habits」 1995年

1) 矢田部英正 「坐の文明論」 晶文社出版, 2018年

2) 矢田部英正 「椅子と日本人のからだ」 晶文社出版, 2004年

3) 藏澄美仁, 松原斎樹, 鳴海大典, 長野和雄, 土川忠浩, 堀越哲美 「姿勢の違いが体感温度に与える影響に関する研究」 日本生気象学会雑誌, 第35号, 35-44, 1998年

4) 宮本征一, 富田明美, 堀越哲美 「床座位を中心とした各姿勢における接触面積比の再現性に関する研究」 日本建築学会計画系論文集, 第532号, 23-27, 2000年